

編 集 後 記

今年度から開始した2国間研究交流（文科省）の研究打合せのため北インド・パンジャブ州の州都チャンディールという街にある研究機関「医学教育・研究大学院（PGIMER）」を訪れました。チャンディールという街は日本ではあまり知られていませんが、インド・パキスタン分離独立後の1950年代にフランス人の建築家ル・コルビュジエによって設計された計画都市です。街は基盤の目状に整然と区画され、数10のセクタに分かれた区画には、それぞれ、官公庁、教育・研究機関、高級商店街、住宅などが集まっています。

訪れたPGIMERは、1日に約7000人の患者が受診するこの地区最大の病院を併設した医療機関であると同時に、医師養成機関及び医学系研究科などを備えた教育・研究機関です。インドの大学院教育では、欧米諸国と同様、大学院生が初年度から研究に携わることは稀で、まず、研究に必要な各科の基礎知識を習得すると共に、研究手法、科学論文の書き方や研究不正問題などに関する学習に多くの時間を割きます。それでも実際のところ、欧米など先進国との共同研究ではない場合、インド発の論文のレベルがいま一つであることが多いのは否めません。それは一体何故なのだろうと長年思っていました。今回の訪印で明らかになったことは、教育はきちんと行われているのですが、研究機器・設備の更新など研究環境の整備が極めて遅れているということでした。

翻って日本、特に我が杏林大学の状況を見ますと、多くの先生がたのご努力によって、毎年のように、学内の各所に最新の大型研究機器・設備が備えられるようになってきました。ただ、日本の大学院教育では、研究手法、科学論文の書き方や研究不正問題に関して十分な教育がなされているかという点、否という他ありません。しかし、今般、杏林大学では、医学部を中心として各種講演会などでこれらに関する情報をなるべく多く大学院生や研究者に提供しようとしています。そこで今後は、さらに質の高い研究論文が本学から発信されるものと期待されます。杏林医学会雑誌への投稿論文も、さらにレベルの高いものとなって行くのだろうと思うこの頃です。

(F.K.)

編 集 委 員

(長) 岡 島 康 友

井 本 滋	川 村 治 子	小 林 富美恵
杉 山 政 則	照 屋 浩 司	松 村 讓 児
森 田 耕 司	楊 國 昌	吉 野 秀 朗

杏林医学会雑誌 第45巻 第4号

URL : <http://plaza.umin.ac.jp/~kyorinms/>

平成26年12月31日発行

編集人 岡 島 康 友

発行所 杏 林 医 学 会

東京都三鷹市新川6-20-2

杏林大学 医学図書館内